No.2012　　２０２０年１２月２０日発行
日本キリスト教団　吾妻教会月報

あがつま

『わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。』
（ヨハネによる福音書１５章５節）

♪賛美歌を歌おう㉒
『きよしこの夜』
讃美歌－１０９番）

おそらく、世界中でもっともよく知られたこのクリスマスの賛美歌は、一八一八年のクリスマスに、オーストリアの小村オーベルンドルフの教会で、初めて演奏されました。

原作者のヨゼフ・モール（1792-1863）は、その教会で助祭を務めていました。作曲は、教会のオルガニストであったフランツ・グルーバー（1787-1863）です。

『きよしこの夜』の誕生には有名な伝説があります。クリスマスの前日に、教会のオルガンが風袋をネズミにかじられ音が出なくなり、慌てたグルーバーがモールに頼んで急いで詩を作らせ、その日のうちに作曲。翌日のミサで、ギターの伴奏でこの『きよしこの夜』が初めて歌われたというものです。しかし、この伝説は事実ではないことが近年の研究で明らかになりました。決定的であったのは、一九九五年に作詞者モールの直筆譜が発見されたことです。そこにはオーベルンドルフの教会で歌われるよりも二年早い、一八一六年作詞と明記されていたのです。

仙台北教会のオルガニストである川端順四郎さんはその著書で、この歌には「諸民族の和解と平和が歌われている」と指摘しています。

もともとドイツ語の原詩では六節まであったのですが、省略された五節に「主は怒りをお捨てになって…全世界にいたわりを約束された」と歌われていることから、川端さんはこの歌をナポレオン戦争と結びつけて考察しています。☛

☜フランス革命戦争後の混乱期に始まり、全ヨーロッパを巻きこんだナポレオン戦争は、一八一五年のワーテルローの戦いによって終結へと向かいました。およそ２０年もの間続いた悲惨な戦争が終り、迎えた一八一六年のクリスマスに、この『きよしこの夜』という詩は作られたのです。長く待ち望んだ末、ようやく訪れた〝平和〟を噛みしめ、聖書に約束された救済をついに実現してくださった「父の愛」を賛美する『平和の賛歌』としてです。

そして、一八一七年にオーベルンドルフに助祭として来任したモールが、オルガニストであったグルーバーに作曲を依頼したことでこの素晴らしい賛美歌『きよしこの夜』が生み出されたのです。

『きよしこの夜』は、オルガン修理のために、オーベルンドルフを訪れたチロル州フューゲンのオルガン製造者、マウラッヒャーがその楽譜を持ち帰りったことで広まって行きます。この歌は一八一九年にはフューゲンのクリスマスミサで、すでに歌われていました。そして幾つかのグループが、この歌を各地を旅行して歌うようになり、ライプチヒでこの歌を聞いた出版者によって楽譜が出版され、ドイツのルター派の教会で歌われるようになりました。

もともとカトリック教会で作られましたが、原詩に〝聖母マリア〟が登場しないこともプロテスタント教会にとって受け入れ易い一因となったと思われます。その辺りのことも川端さんがその著書で考察されていますので、興味のある方は是非ご一読ください。

【川端順四郎著『さんびかものがたりⅡ この聖き夜に』日本キリスト教団出版局 2009年】

日本語の訳詞は『馬槽のなかに』を作詞した事で知られる由木康（1896-1985）です。この訳詞で小学校六年生の音楽の教科書に採用され、一九六一年から一九八八年まで掲載されていました。また、日本のカトリック教会においては別の訳で「しずけき真夜中」（聖歌 111番）として親しまれています。

広まる過程で歌詞の半分は省かれてしまいましたが、この素晴らしい賛美歌が、モールの思いが込められた〝平和の賛歌〟として歌い継がれていくことを願うものです。